

# 一年後のいま、 いよいよ『舞台』に乗り込む

さいたまゴールド・シアター  
第1回公演 **船上のピクニック**

昨年4月に発足されたさいたまゴールド・シアター。彼らの輝かしい進化の様は、毎号本誌でも追ってきたが、いよいよ本公演！岩松了の新作戯曲を蜷川幸雄が演出するという、演劇界も垂涎の作品に、懸命に挑む団員たちの姿を、稽古開始から感動の初日まで、いち早くレポートする。



【日時】6月22日(金)～7月1日(日) 全9公演  
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 小ホール  
【作】岩松了 【演出】蜷川幸雄

## Rehearsal report

文=木俣 冬 (フリーライター)

本公演の本格的な稽古がはじまった日、制作の元に団員が詰めかけていた。チケットが発売後即完売状態で、関係者分も手に入りにくくなっていたのだ。

「蜷川幸雄演出、岩松了の芝居と言ったら人気公演。普通なら9000円くらいするチケットなのに、俳優が新人の私たちだから3000円。これは貴重ですよ」とある団員は笑った。

舞台は豪華客船のデッキ。再就職先に向かう希望の船旅のはずが、難民を乗せたことで不穏な変化が。お互いが言葉に出さない謎めいた部分から、小さなつむじ風のようにいろいろな感情が沸いてくる。岩松書き下ろしの戯曲を蜷川演出で…2回の中間公演を含む1年間の研鑽を経たゴールド・シアター本公演には、この上もなく本格的な舞台が用意されていた。逆に言えばハードルは高い。

### 岩松 了の台本との格闘

岩松戯曲は演劇界でも高度な戯曲とされている。書かれた台詞とは異なる心理が隠されていて、俳優は書かれていない部分を探り、演技でそこはかとなく感じさせなくてはならない。

冒頭からその最たるもの。「私は避けられてと思ったの」と突然言い出す女性は、干しぶどうを頬張りながら「お友達」と呼ぶ相手に自分のことを語り続ける。なぜ彼女は延々自分のことを語るのか？「インテリ女性が周囲に相手にされない理由を他人のせいに転嫁し、自己防衛している」と蜷川は分析。ぶど

うを食べるタイミングを意識的にしたり、髪の毛をかきあげる仕草を採り入れたり、人物像が次第に立体化していく。いきなりしゃべり出すその前から会話が続いているリアリティーにも気がつかう。このシーンは何度も何度も繰り返された。日々続く特訓(?)にグッタリする団員に蜷川は「ある日突然できるようになるよ。でも苦労しないとそういう日は訪れないんだ」と励ました。

うを食べるタイミングを意識的にしたり、髪の毛をかきあげる仕草を採り入れたり、人物像が次第に立体化していく。いきなりしゃべり出すその前から会話が続いているリアリティーにも気がつかう。このシーンは何度も何度も繰り返された。日々続く特訓(?)にグッタリする団員に蜷川は「ある日突然できるようになるよ。でも苦労しないとそういう日は訪れないんだ」と励ました。

### 三方向舞台で成果を発揮する

戯曲も難しいが、船上が舞台で三方向に客席があるという状態での立ち方、動き方も難しい。一定の方にばかり向いていると逆側には常に背を向けていることになるので、意識的に各方向に顔を向けるように気を使わなくてはならない。蜷川は、俳優たちの動きを細かくつけるため、共に船のセットの上でクルクルと動き回っていた。まるで乗組員のひとりのようだ。



「三方向に開いた舞台は難しいが、個性的なみなさんの姿を見せるにはこのほ

うが効果的」という蜷川の言葉は団員の志気を高めた。

ダンスシーンもある。1年間ダンスレッスンも行ってきた団員だから、華麗なダンスを披露できるはずだが、これまた道のは果てしない。「ラテンナンバーなんだからもっと陽気に！」と振付家・広崎うらんがハッパをかけた。

やらなくてはならないことが盛りだくさん。でもコレを乗り越えることで一年間の取り組みの意義を立証できるのだ。

